令和元年度 須賀川市立第三中学校現職教育 研究のまとめ

今年度は「『協同的な学び』を通して，深い学びが成立する学習指導の工夫」という主題のもと，副主題として，「～学び合いが深まる「ジャンプの課題」の工夫～」を設定し，全教職員が研究実践にあたってきた。その成果と課題について３つの方法の観点から考察していきたい。

（１）成果

方法①： 対話によって学び合う「協同的な学び」を中心とした授業を継続し，教師全員が目指す生徒の姿や学ぶ様子を共有し，研究授業後の話し合いを行う。また，定期的に授業を参観し合うことを通し，生徒の学びの姿をみとり，把握するとともに，その手だてについて話し合う。

本校では，平成２４年１月から「協同的な学び」に取り組み始めた。また，市の学力向上推進研修会へ授業を提供し，学習院大学教授，佐藤学氏の指導助言を受けたことをきっかけに，平成２４年度４月より全学年・全教科において本格的に「協同的な学び」を授業に取り入れ，実践してきた。当時は４人グループやコの字型に机を配置するなど，「協同的な学び」の環境作りから実践を始めた。小グループの中で，生徒のコミュニケーション能力を高めることを重点とした取り組みを行うことにより，学校全体の課題であった不登校生徒の減少や学力の向上を狙ったものであった。その後も，「協同的な学び」を通して，生徒が自分の考えをより深め，一人ひとりが高いレベルでの学びを成立させることを目指して実践を継続してきた。さらには，その目標達成に向け，教職員が研修をより一層深めていくことを推進するため，一昨年度から「協同的な学び」を研究主題に設定して取り組んできた。

今年度は，昨年度までの実践の成果と課題を踏まえ，年間３回の研究授業や年間を通した「学年授業参観」として授業の相互参観を計画・実践してきた。全職員で「協同的な学び」について研修を深めることができたのは大変有意義であった。これまでの成果として，全職員が，普段の授業から「協同的な学び」を強く意識した実践を行い，生徒の「学び」についてみとりを共有していくことを継続して行ってきた。また，教師にとって生徒の「みとり力」を上げるためには，導入から終末までを通した参観が望ましいとのことから，今年度も１時間を通して参観することを基本とした。

さらに，授業参観後に学年内での事後研究会を行い，授業での生徒の様子や変容など，生徒のみとりについて話し合う機会を設けた。これにより生徒の様子を共有できるだけでなく，自分の授業作りに役立てることや学級・学年経営の改善に役立てることも可能となった。この取り組みにより，各教師が自らの授業を振り返り，授業改善の意識を向上させた効果はもちろんのこと，自分の教科の時にはみとれなかった生徒の学びの姿を見ることができ，新たな発見とともに生徒理解が深まり，生徒と教師のより良い人間関係・信頼関係の構築にも役立った。

「学年授業参観」の指導案については，今年度も授業の流れだけを記載した「授業デザイン」という簡略化された指導案を継続使用した。参観者が「生徒の学びの様子」を書き込む形式のシートであるため，参観者にとっては「みとりのトレーニング」のツールとして活用できた。また授業者にとっては，その記載から，授業中は気づかなかった生徒の様子を知ることができた。そして何より，子どもたちの様子を話し合うことで，生徒だけではなく，教師自らが「お互いに学び合う」ことや「共に高め合う」ことができたのも成果の一つと言える。

外部講師を招聘し行った研究授業は，普段の研修の成果を確認する機会となった。的確な助言を受けたりお互いの考えや悩みを聞き合ったりする場を設けたことで，日頃の実践をさらに充実させるためのよい機会とすることができた。

この時の事後研究会は，学年や教科の垣根を越えた新たなグループ（１グループ４人～５人）での協議とし，生徒の学びのみとりから学んだことを話し合い，話し合った内容を発表して，授業参観を通して，得たことを共有して，それぞれの授業に生かすことができるようにした。自分が担当する学年や教科以外の視点からのさまざまな指導法や，生徒の客観的なみとりを学び合う取り組みとなった。また今年度は，座席表を拡大した模造紙を活用し，「意見交換」や「みとりの共有」の際に，有効に活用できた。一昨年から行っている各自が撮った写真を掲示して，実名を使っての共有はとても効果的だった。授業批判ではなく，あくまで生徒のみとりの共有なので，授業者への精神的な負担が軽減されたことも良かった。

方法②：　「自分の考えを深める」ために，他者の考えを集中して聴き，自分の考えと比較・関連させながら，自分の考えを補強・発展させ，まとまった考えを「自分の言葉で書く」活動を工夫する。

今年度は，学びの質を高めるために昨年度の重点事項の「自ら表現する力を高める工夫」をベースに，他者との比較や関連によって深まった自己の考えを「自分の言葉で書く」といった，表現力を高めさせることにも力を入れてきた。以下の４つの場を設けながら，授業を展開してきた。

①一人ひとりの「学び」を保障するために，「読む」「観察する」「確かめる」「操作的な活動をする」「考えをまとめる」などの，対象とじっくり関わり，自分の考えを持つ「個人の活動」の場を設けること。

②４人または３人一組での話し合い活動や２人でのペア学習や共同作業の中で，多様な考えを出し合い，すりあわせることでお互いの考え方の違いや良さに気づく「協同的な学び」の場（小グループでの活動）を設けること。

③他者の考えを集中して聴き，それに対する自分の考えを関連させたり，比較したりしながら，自分の考えを補強したり発展したりして「自分の考えを深める」場を設けること。

④深まった考えを自分の言葉でノートやワークシートに記入させるとともに，そのための時間をきちんと確保すること。授業のまとめとして，振り返りの場を設けること。

今年度の実践例から見てみると，第１回授業研究会（３年音楽の授業）においては，「謎の曲」が表現しようとしている世界を生徒が感じ取って描いた「絵」をもとに，それぞれがその思いを言語化して説明し合うことにより，多様な考えに気づき，さらに他班の発表によって，より曲に対するイメージを膨らませることができた。また，適宜ワークシートへの記入や振り返りの場面で感想を記入させるなど，「自分の言葉で書く」を意識した授業となり、より学びの深まる実践が見られた。第２回授業研究会（３年社会の授業）においては，「人権と人権の衝突」を題材として取り上げ，ある事例から対立する２つの人権に対する考えを，多様な資料をもとに考察させた。具体的な根拠を提示して，各自の考えを明確にし，他との比較を行うことで，多面的・多角的に考察することができた。個人の考えをしっかりと持たせる時間が確保された上で，自分の考えを修正するための時間の場も設定されていた。また，授業の終末では，振り返りを行い，学んだことを自分の言葉でまとめ，より深まりのある学習の時間となった。

生徒のアンケート結果においては，「大切なことはノートなどにまとめたり，メモしたりしていますか」の項目から分析すると，全体で９０％を超える生徒が肯定的な回答をしている。また，１回目の意識調査よりも２回目の方が上昇していることから，書くことに対する意識が高まったものと考える。

方法③：　授業の中で意図的に「ジャンプの課題」を取り入れることにより，生徒が課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力を高める場を設定する。

これまでの「協同的な学び」の実践の結果，生徒同士のコミュニケーションが深まり，対話を通しながら学習に取り組む雰囲気が作られ，様々な生徒の活動の場の設定の工夫で自らの考えを表現することができてきた。研究１年次から２年次にかけて「聴き合う関係」づくりや「対話」の工夫に重点を置き，それらが成果となって現れてきた。そして今年度は，さらにその土台の上に立ち，「深い学びを成立させる」ために，全員が学びに夢中になるような「ジャンプの課題」の設定を意図的に取り入れることに重点を置いて研究を進めてきた。特に研究授業や学年授業参観の際に活用している授業デザインを，今年度より「ジャンプの課題」を明記するよう改善し，意識して授業を展開できるよう工夫した。

実際の取り組みとしては，各教科部会で課題設定についての話し合いを行い，アイディアを共有した。また，研究授業後の指導助言を参考にするとともに，他教科の授業からヒントを得ることができた。研究授業や学年授業参観で用いられた「ジャンプの課題」は以下の通りである。

国語「ロールプレイングの中で，観察者が正しい敬語を用いていたかを指摘することができる。」
「冒頭部分を全体で訳して方法を確認。その後グループで訳す。」
社会「Ａの現状は仕方がないことだろうか。」
「果樹栽培が盛んな理由を考える。」「夏場にピーマンを出荷しない理由を考える。」
「縄文時代と弥生時代のどちらかで生活するとしたらどちらがよいか。その理由を様々な視点から書きなさい。」
数学「三角形が一つに決まるための，３つの情報の条件を考える。」
「√８＋√２の計算結果が，どのようになるのか図の面積や辺の長さなどをもとに，根拠を明らかにしながら説明する。」
「視力とランドルト環にはどのような関係が成り立つか。」
理科「塩酸に水酸化ナトリウム水溶液を加えていくとどうなるか、モデルを使って予想しよう。
「実験終了後に，ロウにふれて本当に固体になったかを確認してみよう。」
英語「ある人物についての知り得た情報をもとに，その人物に質問文を含む３文字以上の英文メッセージを書く。」
「学校行事の説明に，オリジナルの一文を加える。」
音楽「５つの場面を意識して聴く・説明する・話し合うことによって考えを深めていく。」
美術「色粘土玉を用いて，自立する量感（ボリューム）ある作品を制作し，設計図に迫る。」
保体「両足で胴締めされて防御している相手の足を外して，押さえ込む返し技を考える。」
家庭「「エネルギー」「塩分」を考えて献立を立てることができる。」
特支「中心のとり方と縁の貼り方のポイントを理解して貼ることができる。」

「ジャンプの課題」の設定は，教科の特性上難しい部分もあり，試行錯誤をしながらではあったが，一定の成果も見られた。第１回授業研究会（３年音楽の授業）においては，５つの場面で構成された「謎の曲」を聴き，自分が感じ取った場面を「絵」を用いて説明する。前時までにイメージした場面を「絵」で表現し，本時に再度曲を聴いてから，イメージしたものを言語化する活動である。前時の活動からステップアップした「課題」が，本時の「ジャンプの課題」となっていた。なかなか難しい作業ではあったが，生徒たちは，恥ずかしがらずに生き生きと表現している姿が見られた。また，他の作品を鑑賞し，比較することで，楽曲をより深く感じることができた。第２回授業研究会（３年社会の授業）においては，「Ａの現状は仕方がないことだろうか。」という授業のめあてそのものが「ジャンプの課題」として提示され，根拠を示すために多様な資料を用いて課題解決に取り組んでいた。資料を何度も読み，根拠をノートに整理しながら，自己の考えを構築していった。一問一答では答えられない課題を設定し，他と比較しながら練り上げていく活動によって，深い「学び」が成立していた実践であった。

生徒のアンケート結果をみると，３年生においては「グループ学習では，難しい問題でも友だちと協力して問題を解決しようとしていますか」という項目で約９０％が肯定的な回答をしている。このことから「ジャンプの課題」を効果的に取り入れたことが，生徒の意欲喚起につがっていることが考えられる。「問題を解くときに，図を描くなどして工夫して解こうとしていますか」の項目でも，上昇が見られた。これは「ジャンプの課題」に取り組む際に，質問したり，他と比較したりするなど意見交換が日常化し，学び方が定着してきたものと考えられる。

教師のアンケート結果を見ると，「ジャンプの課題」を実践してきたことにより，「思考力・判断力・表現力」の高まりや「深い学び」の達成をおよそ７割が実感している。そして「協同的な学び」が目指す生徒の姿「主体的・対話的で深い学び」の実現については，およそ９割が実現に繋げることができたと考えている。自由記述においても成果を実感する記述が多かった。

（２）課題

今年度の研究を終えて，多くの成果が現れた反面、課題も見えてきた。今年度の研究主題における３つの方法に沿って振り返ることとする。

【方法①の取り組みについて】

この取り組みでは，教師全員が生徒の学びの姿をみとり，研究授業後の話し合いで共有し，把握するとともに，生徒への今後の手立てについて話し合ってきて一定の成果を収めてきた。授業研究会の持ち方として，永島先生より「子どもの事実の交流ではなく，子どもの事実から学ぶ研究」「一人残らず質が高く，５０分間ずっと学ぶ授業のための研究」「参観者全員のみとることのトレーニングとしての研究」という助言していただいた。また，村瀬先生より「子どもの事実から学ぶ場」「授業の善し悪しを話し合う場ではない」「先生方の事実の語りから何を学べたかを語れる場」という助言をいただいた。これらの助言を生かして，次年度の研究を推進していきたい。

また，昨年度に引き続き，学年の教師全員が授業を５０分間通して参観することへの課題があげられていたが，今年度はそれぞれの教員の授業を自習にすることが無いよう，授業をうまく組み替えて対応することができた。しかし，単元構成や学校行事等で年度初めに予定していた月には実施できず，後半に立て続けに学年授業参観を実施することがあった。計画的に進めるにはどうすればよいのか，意識改善も含めて今後の課題として取り上げたい。

【方法②の取り組みについて】

この取り組みについては，一定の成果が得られたが，課題も見えてきた。昨年度の課題としてあげられているのが，従来の班活動からの脱却（個人→班→全体）である。第１回授業研究会（音楽）の指導案検討会では，班で選んだ作品を全体で鑑賞し合うことで，楽曲をより豊かに感じる心を育てたいという教科担任の思いもあり，従来の班活動に近い形となってしまった。第２回授業研究会（社会）では，「人権と人権の衝突」について，自己の考えを他者と比較・関連させるため，班活動からさらに他班への移動も可とした。こういった手法が「協同的な学び」でいう「学び合い」つまり「自己追求の支え合い」になっているのか，疑問を残す形となった。しかし生徒の様子から，学びの深まりを大いに実感することはできた。

「自分の言葉で書く」ことに関しては，表現力に乏しい下位生徒をどうするかが大きな課題である。ノート整理もままならない生徒や無気力で何もしない生徒が少なからず，各クラス若干名見受けられる。また他への話しかけが苦手な生徒や人間関係で問題を抱えている生徒など「聴き合う関係」がきちんと成立していない学級があるのも大きな課題である。

【方法③の取り組みについて】

この取り組みについては，生徒の様子やアンケート結果などから見ても大変効果的であることが分かったが，やはり課題点も浮き彫りになってきた。まずその理由として「ジャンプの課題」の作成の難しさがあげられる。昨年度も課題点としてあげられたが，生徒の学びの実態を把握し，教科の本質に迫りながら生徒全員が夢中になって取り組むような課題を考えていかなければならない。永島先生からは，「レベルを上げること（高校レベルでも良い）」「達成に向けてのプロセスを大切にすること」との助言をいただいた。しかし，実際に研究授業や学年授業会において設定された「ジャンプの課題」がその域に達していないのも現状である。上位生徒は「ジャンプの課題」への食いつきは良いが，下位生徒の食いつきが悪いなど，設定の仕方をさらに工夫する必要性がある。また，教師のアンケートでは「ジャンプの課題を工夫して実践できたか」の項目に関して，肯定的な回答が７割にとどまってしまった。やはり，設定が困難な教科も考えられ，積極的に挑戦できなかったと思われる。なお，アンケートの自由記述においては，次のような意見が出された。保健体育では「ジャンプの課題を設定するには，体力的・技術的・知識的な面で，個々に差が大きく，なかなか設定しにくい。」，社会では「班集団に対して，適切なジャンプの課題を設定するのが難しかった。」，数学では「学力の低い生徒もいるので，適切なジャンプの課題の設定が課題である。」

しかし，「ジャンプの課題」の解決のために仲間と協力しながら学び合う姿も見られ，下位生徒を中心に基礎・基本を定着させている様子が伺えたことも事実である。課題に取り組む過程で，周囲の生徒に聞いたり，教科書本文や資料集で調べたりする姿も見られるようになってきたので，工夫を重ねながら継続していくことが「深い学び」につなげていくために重要であると考える。

今年度は，「協同的な学び」の研究推進３年目であり，まとめの年であった。これまでの研究の成果を土台とし，共通理解を図りながら十分な成果を得ることができた。しかし，課題も明確になってきたことは，今後の「本校の学び」にとって大変意義のあるものであった。子どもたちが「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにも，「協同的な学び」を授業の柱として，教職員同士が学び合い高め合いながら，一層研修を深めていきたい。